
銀の歌姫 花冠

深月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の歌姫 花冠

【Nコード】

N7685R

【作者名】

深月織

【あらすじ】

小国ランシアへ嫁取りに訪れたのは北の大国ブランシェリウムの王。ランシアの末姫スノーリアは姉の夫になる予定の彼と、何故か親しく言葉を交わすことになり

【魔女とお婿様】 スピンアウト。

その朝もスノーリアは一人で近くの森へ出掛けた。

もちろん無断でだ。

誰かに見つければ軽く一ヶ月の外出禁止令が出るだろうことは百も承知の上。

だが、今のところ誰にも見とがめられることなく彼女の朝の外出は二週間も続いていた。

一番早起きの使用人が起きるほんの少し前、まだ皆が眠りの中にいる明け方に窓から自室を抜け出して、警備兵の交代がある慌ただしい時間に合わせて戻っている。

スノーリアが属する身分の者たちは、社交等で夜遅くまで活動するため朝が遅いのは普通だと思われるので、彼女の多少の寝坊も見逃されていた。

なんだかその理屈ってヘン、と常々彼女は思っていたが、そのお陰でこうして誰の邪魔も入らず行動が出来るので、いい加減なことには目を瞑ろう。スノーリアはそうして自分を納得させている。それに、彼女が幼い頃から仕えてくれている老侍女の言葉に意見しようものなら、その数倍のお小言が返ってきて、最後にはうんざりするようなため息を吐かれるのだ。あれにはこちらの胃も痛む。

お互いの精神衛生上、どうすればよいのかなんて今までの人生で学びきっていたスノーリアは、侍女の前では彼女が望むとおりの振る舞いを心がけている。

だから、一日の間の少しくらい、自分のしたいことをしてもいいと思うのだ。

スノーリアとてもう十四、供も護衛も付けず一人で行動すること

がどれ程危険かで立場を弁えないことが、自分でも分かっていた。目立つ髪を頭巾の中に入れて押し込んで、くたびれた地味な色の生成りのドレスにエプロンをした自分は、村娘、いいところ町娘にしか見えないはず。なんの危険があるうものか。

世間知らずで育ちのよい彼女は、若い娘に付きまとう危険というものを全く理解していない。

どうせ、と彼女は思う。

どうせわたくしはオマケなのですから、どうなったって、真実困ることにはなりませんわ。

そんな、世俗でいうところの“やけっぱち”な考えを持って。ここ最近の彼女は　そう、“グレて”いたのだ。

そうして今日も、部屋を抜け出したスノーリアは、塀の隙間に身を滑り込ませ、生け垣に隠された穴から外に出た。

ふうふう息を弾ませながら、泉から汲んだ水を運ぶ。

最初は道程の半分もいかないうちに重さに耐えきれず、桶を引きずり水を溢していたものだが、今はこうして持ち上げられるようになっていいるのだから、随分慣れてきた、と自慢するように思っている。

自分が何かをするたびに、“くしちゃいけません”と言われることのないこの時間は、スノーリアにとって貴重なものだった。

自身で水汲みをするのも。土を掘り、草を抜き、種を蒔くことも。

白い手が泥で汚れても、咎める者はいない。

まして、好きな歌を歌っても、ハシタナイと眉をひそめられることとはないのだ。

花の育ち具合を点検しながらスノーリアはご機嫌で歌を口ずさむ。装飾と技巧と規定に満ちた、“相応しい”歌ではなく、楽しい気持ちのまま、弾む心のまま、伸びやかに響く歌を。

市井で流行るそれを、品がないとマリーンは言うが、歌は歌、なんの違いがあるものか。

スノーリアは歌わされるのではなく歌いたい歌を歌いたい。

宮廷音楽など静止している生のように好きじゃない。

昨日ついつかり無意識に口ずさんでしまったその歌を注意された不満と相まって、現在スノーリアは絶好調。彼女が育てている花と、森の緑以外は聞くものない独唱会を開いていた。

妖精がいる。

年甲斐もなく子供だましなそんなことを一瞬思っ、彼は気付かれないよう息を潜めた。

季節外れに咲き乱れるブランシェの白い花、色とりどりの小花に囲まれて、その妖精は座り込んだ姿勢で歌を歌っていた。

色褪せた頭巾から溢れる銀の髪、けぶる睫毛に隠れた瞳は紫水晶。稀有な色彩と儂さを感じる幼い美貌と華奢な体躯に、そう思っても仕方はないと彼は言い訳じみたことを考える。

幼い少女に見惚れたなんて、バレたらどんなからかいを受けるか。

格好はどう見ても村娘。だが、身に纏う空気は、少女がただの娘ではないと教えてくる。

「……エッデイ、お前ね、先々行くなよ」

付いてる俺の立場も考えろ、ぼやくような呆れ声に振り返ると、森の中にも鮮やかな赤髪の男が眉をしかめてそこにいた。

どういふ修行をすれば森の中足音を立てずに動くことができるのか、つくづく不思議な男だ。

一度訊いたことがあるが、「んー、慣れ？」と、答えにならない答えをへらりと返され、コイツに真面目な返答を求めるのは止めたのだった。

ゆっくりとこちらへ近寄り、彼が見ていたものを目に止めて、ニヤリと笑みを口の端に浮かべる。

「覗きなんてするようなコに育てた覚えはありませんよ……と、こりやまた、なんでこんなところにいらっしやるんだ？」

お前に育てられた覚えもない、と軽口を叩こうとして、彼は連れの言葉に首を傾げた。

いらっしやる？ その台詞は少女のことを知っていて且つ目上に向けるもの、

「知っているのか」

妖精じゃないことはわかっていたが。と自分の中だけで呟き、渋い顔をしている男に碧い瞳を向ける。

「ああ、あちらは俺のことなどご存知ないと思うけどねえ。あー、あー、道理で」

クルリと顔は動かさず、視線だけで辺りを見回す。その左手は、姿を現した時から剣の柄に宛てられていた。

“それ”には自分も気付いていたが、こちらの一挙一動を窺うだけの気配だったので放置していた。

どうにかするのはコイツの仕事だ、と本来の男の肩書きとは違う行動をさせていることは柵に上げ、丸投げする気満々だった。

「雪白姫　　と言えはわかる？」

告げられた言葉に眉を上げる。

なるほど、確かに“何故こんなところにいる”だ。

森の拓けた一角に、まるでそこだけ別の世界のような花畑が広がっている。

その中心で、機嫌良く歌を口ずさんでいる少女。しゃがんだと思

えば土をいじり、また立ち上がって別の場所へ行き、しゃがんで土をいじり、その様子から、この花畑の主が誰なのかわかるというものだ。

土の中から身をくねらせる虫をヒョイとつまみ上げて投げ捨てる、平然とした姿に笑いが込み上げた。

華奢な砂糖菓子を持つに相応しい小さな指先が土で汚れても、悲鳴を上げるようないやらしい虫に触れるのも、彼女は全く平気らしい。

楽しげに、花の世話をする少女に和むものを感じ、彼は問う。

「彼女はいくつだった？」

「……十四歳であらせられますよ……、ってオイオイ、またややこしいことを」

クツクツと込み上げる笑いを抑えて訊ねた主に、供の男は最高に嫌な顔になった。

十四か、幼いが許容範囲だな、と呟いたその愉しそうな表情に、もう決められてしまったことを悟り頭を抱える。

（ごめん、アイラちゃん。カノンちゃん、パパはちよつと帰るの遅くなりそうだよ……）

自国にいる最愛の妻と生まれたばかりの娘に思いを馳せ、男はすでにこの国に来たことを後悔し始めていた。

「さあさあさあ、姫様！こちらにいらして下さいませ！」

窓辺で刺繍を刺しながらウトウト微睡んでいたスノーリアは、上機嫌で部屋にやって来た年嵩の侍女の声に目を瞬く。

その後から様々な衣装や装飾品の箱などが運び入れられるのを見て、首を傾げた。

「なあに？ どうしたの、マリーン」

今日の午後の予定はなかったはずだ。もう少ししたら、お茶でも用意してもらってのんびりしようと思っていたのに、これは一体何事なのだろう。

「お客様がいらしてますからね！ 綺麗にお仕度してお迎えしなければ」

侍女の張り切る様子に、ますますスノーリアは首を傾げる。

「お客様……って、確か、ブランシェリウムの国王様でしょう？」

お姉様ならわかりますけれど、わたくしが出る必要はないはずだ。父母にも何も言われていない。」

かの大国の王は在位十年、今年二十七になる青年王だが、まだ妃を迎えていない。

どこの令嬢や姫君が彼を射止めるか噂だったが、最近になってスノーリアの姉である一の姫フレイアが有力候補に上がっていた。

今年始めに彼の国から交易に関する文書がランシアに届き、それをきっかけに友好を深めてきた。

大国に囲まれ生き残るために今までどの国に対してもずっと中立を保っていたこの国だったが、即位以来様々な改革を押し進めてきた現女王はここで一歩踏み出すことにしたらしい。

ハッキリと意思表示をされたわけではないが、宰相が姉姫にそれとなく意向を訊ねていたらしいことを聞いた。

お姉様は断固拒否、と仰っていらしたけれど。

スノーリアが言うのにマリーンは顔をしかめた。

「それが、一の姫様は夕べ遅くにご領地にお出掛けになられたと言っていますよ。呼び戻すには時間がかかりますし、とりあえず失礼のないようスノーリア様だけでもご挨拶なさるようにと」

まったくもう、あの方は王女である自覚が足りません、女だてらに剣を持って馬を乗り回すなど、それもこれも父君が……、それを耳にするスノーリアが眉をひそめても気付かず、老侍女の不平はいつものように続く。

ブランシェリウムの国王様も、お姉様を捕まえたいのなら、

前もっていらつしやるのを告げずに、奇襲をおかけになればようございましてのに。

間違ひなく敵前逃亡を企てた姉を思い、予期せぬ社交をしなくてはならなくなつた三の姫スノーリアは小さくため息をついた。

「スノーリア・ルチル・ランシアにございます。お初にお目にかかります、国王陛下」

淡い水色のドレスに飾り立てられたスノーリアは目の前の人物に向かつて膝を折る。

初めて会う大国の王は、彼女の背丈より倍はある上背に、逞しい体つき。何度も激しい戦を潜り抜けた武人でもあるというから、それも当然か。

彼の脇に控えた文官は燃えるような赤髪だったが、王の髪は柔らかな。そう、日が落ちるほんの少し前の太陽の色をしている。

微笑みを浮かべた精悍な顔立ちは、妹の目から見ても綺麗だと思ふ兄たちの容姿とは違い、男らしいものだった。

この方なら、お姉様の隣にいらしてもちつとも見劣りなさいませんわ。武に優れてらつしやると聞いていたから、怖い方かと思つていましたけれど、微笑んだ顔はお優しいし。お姉様つたら、早まわれましたわね……。

「初めまして、姫君。ブランシェの花は好きですか」

スノーリアの銀の髪と胸もとを飾つた白い花に目をとめて、彼は碧い瞳を和ませた。

何かがオカシイ。

スノーリアは戸惑いながら思う。

一の姫フレリアは未だ領地から戻らず、再三の宰相からの伝達は無視される形となっていた。

にもかかわらず、女王は王女が戻らぬことをさして咎める様子もない。不在を詫びるわけでもなく、対等の君主としてブランシエリウム国王と接している。

母女王がランシアの王位を継いだのが十九のとき、ブランシエリウム国王も十七で即位という苦勞が似ているためか、彼を気に入ったようで、滞在が延びようが全く構わないようだった。

といいますか、少しノンビリが過ぎるんじゃないかしら？

あちらはようやく情勢が落ち着いたところなのですから、上の者があまり留守にすると国民が不安になるじゃありませんの。

求婚に来た相手がいないなら出直すとか、もうこの際、追いかけるとかなさる方が、お姉さまも根負けされてお話を聞く気におなりになるかと思えますのに。

少なくとも

「気持ちのよい庭園ですね。とても心が休まります」

「ありがとうございます。ですが、ブランシエリウムにも広く立派な王宮庭園があるとお聞きしておりますわ。比べられるとお恥ずかしいのですが……」

リラックスした様子の青年王の隣を歩きながら、スノーリアは慎ましく微笑んだ。

少なくとも、求婚相手の妹に訳の分からない愛想を振りまいているより、そうする方がずっとマシなのではないだろうか。

姉姫が不在のため、何故か、あの日からずっと、ブランシエリウ

△国王の歓待は全てスノーリアに任されていた。

彼と共にやって来た赤毛の文官は表向きの訪問理由である交易に対する話し合いに出席している。そのことは文官殿に一任しているらしく、国王が会議に出席することはない。

彼自身は本当に姉姫を口説きに来ただけのようだった。

しかし目当ての人物がいないためか、晩餐会、昼間のお茶会に出席し、ランシアの官僚貴族たちと交流を深める以外は、ほぼこうしてスノーリアと時間を過ごしている。

お兄様たちはそれぞれのお仕事がありますし、シルビア姉様はお子さまが生まれたばかりだし第一降嫁された身ですもの、公務を押し付けるわけにはゆきませんわよねえ……。

三の姫という身分だけを持ち、王族の仕事を課せられていないスノーリアが国王の退屈を紛らわせるために、話し相手を務めるのも仕方がないと思う。

現在、彼の身分に見合う接待役が彼女しかいない為、子どもの姫の相手をしなければならぬ国王には逆に申し訳ない気がするが、彼は気を悪くするどころか、時折こちらがドキリとするような親しげな微笑みをむけることもあった。

そう、今のようじ。

「興味があるのなら、一度我が国にいらしてご覧になればいい。お返しにご案内しますよ。この国にはない植物などもあったはずだから、きつと姫はお気に召すでしょう」

まあ、種か苗を頂けないかしら……と、うつかり国王の話に乗りかけたスノーリアは次の瞬間我に返り自重する。

社交辞令を真に受けてどうする。姉ならともかく自分がブランシエリウムに行くことなど、出来るはずもないのに。

「そうですわね、陛下にご案内して頂くなど恐れ多いことですが、嬉しゅうございますわ。機会がありましたら、是非」

こちらも社交辞令のつもりでそう答えたスノーリアに、国王は艶のある笑みを浮かべた。

「ええ、是非」

その書面を前にして、ランシアの王太子は呟いた。

「あの国王、幼女趣味か」

女官たちがキヤアキヤア騒ぐ麗しい眉間に深いシワが刻まれる。

息子の不快さを隠さない表情に苦笑しつつ、窓から彼は、庭にいる背の高い人物とその隣をちょこちょこ歩く小さな姫の姿を見やっ
た。

個人的には頷くのに躊躇いがある彼の国からの申し出だったが、
国力を考えると縁として悪いどころか願ってもないものだ。

難を言うならば、まだ三の姫は幼く、彼との年齢が開いているこ
とが危惧される。そしてもうひとつ、彼女には手放しで縁談を受け
入れることが出来ないある事情があった。

調べ通りなら、ブランシェリウムの国王がそれを気にすることは
ないだろうが。

シグルド王太子はブランシェリウムの印章が押されたその書類を
卓上に叩きつけ、父に苛立たしげに詰め寄った。

「王はフレイアがお目当てだったんじゃないんですか。いないから
といって、その妹に鞍替えするなど節操のない」

「うーん。というか、うちの姫なら誰でも良かったのが、スノーリ
アに会って、その考えを変えたと言うか」

「……………真性？」

ものすごく嫌な顔になる長男。

書類を取り上げ、横にいる兄と全く同じ顔の次男がそれを眺めた。
「母上は何と？ ……父上にコレを持ってこさせる時点で、答えは
出ているようなものですが」

「お受けになるおつもりでいらっしやるよ。

ただし、」

末の妹を溺愛する息子らの視線がキツくなり、その抗議を遮るかたちで彼は続ける。

「スノーリアの意思が優先だ。強制はしない」

今日で三日。

グツタリと寝台に身を預けて、スノーリアは自分の中の精神疲労度が限界まで来ていることを自覚していた。

朝、通常より早い時間に起こされ、長々とその日着る服を選ばされる。選び終えたかと思うと何人もの侍女たちの手で仕度を整えられ、スノーリアの大嫌いな化粧を施され、横で抑揚まで真似できるマリーンの“姫君としての心得”を聞かされ続ける。ため息が胸にたまった頃に、ブランシェリウム国王との時間。嫌な顔も出来やしない。失礼のないように笑って、それなりに神経の使う会話をし作り笑顔が張り付きそうだった。

ここ数日、公の場に出る事が多く、自分に集まる視線にも疲れていた。

どうせ、“ああ、あんな姫もいたな”、と思われているんでしょうけれど。

マリーンはやけにソワソワしてはしゃいでいるし。「やはり私の育てた姫様ですわっ」なんて、何のことなんだろう。変なマリーン。変と言えば、あの国王も変だ。

暗闇に手をかざして、“それ”を思い出す。

会話のなか、国王陛下、と呼んだ自分に。

エドヴァルト、と呼んでくださって構いませんよ。いちいち国王陛下じゃ堅苦しいでしょう？

キョトンと素の表情を見せてしまった隙に手を捕らえられて、指

先にキスを落とされた。

あまりにもさり気無く口づけられたから、驚く間もなかったけれど。

アレってなんだか変じゃなかったかしら？

堅苦しいも何も、一国の国王を名前呼びすることなど出来るわけがない。家族さえ、人目のあるときは畏まった呼び方をしているのに。

……お姉さまに求婚する前から、妹気分なのかしら……。
なんとなく熱があるような気のする指先を、ギュツと握り込んだ。

油断すると閉じそうになる瞼を擦って、スノーリアはフラつきながら通いなれた道に足を進める。

三日、だ。三日来れなかった。

ブランシェリウム国王が来てから、晩餐会やいろいろで、明け方に起きることが出来なかったのだ。

今日はようやく根性で起きて城を抜け出したが、自分が来なかった間に花たちが弱っていないかと思うと、気がはやる。

あの森は特別な森。そう簡単に、一度芽吹いた緑が失われたりするはずはないけれど、

時折つまづきそうになりながら、その一角に出た瞬間、変わらぬ光景にスノーリアはホッと息をついた。

ブランシェの花はふっくらと頭を持ち上げ、その白さを際立たせるように周囲の小花たちも鮮やかな色を競っている。しかし、考え尽くして配置したことで、争うことなく調和のとれた花畑になっているはずだ。

知らず、笑顔になって駆け出す。

眠っても取れなかった疲労が、この場にいるだけで癒されていく

ような気分になる。

待たせてごめんなさいね、と揺れる花弁にささやいて、まず水を汲むために桶の入った道具箱に手を掛けた。

「手伝おうか？」

スノーリアの小さな手が桶の柄をつかむより早く、背後から伸ばされた腕がそれを拾い上げる。

ここで聞くはずのない男の声に、スノーリアは固まった。

「水場は何処かな。案内してくれるか」

笑みを含んだ声。だが、振り返ることができない。

どうして。

何故。

頭に浮かぶのは疑問を表す言葉ばかりで。

「姫？」

「きやあああつ！？」

グルリと回り込むように顔を覗き込まれて、思った通りの人物がいたことにスノーリアは仰天した。“彼”から飛び離れようとして足元の小石に足を取られる。

おっと、と軽く呟いて彼は彼女の背を支えた。

ダンスのとき以上に密着する他人の身体に、スノーリアは慌てて目の前の胸を押し返した。しかし引き寄せられた力は緩んだが、彼女に触れた手はまだそのまま。

淑女のたしなみなどすっかり忘れはて、スノーリアはまじまじとその男を見上げた。

自分が今まで会っていたときとはまるで印象の違う、彼を。

いつもきちんと整えられていた濃い金の髪は、前髪が下ろされて手で撫で付けただけの様子で、使い込まれた感のあるマントに旅人のような動きやすさと丈夫さを重点に置いた服装。遠目にはわからないだろう、その姿。彼が一国の王などとは。

「こ、国王陛下っ！？ どうして……、」

ただひたすら驚いて口をパクパクするスノーリアに、彼は悪戯め

いた笑みを閃かせる。

「そろそろ城を抜け出す頃合いだと思ったのでな。きっとここへ行くのだからと、ついてきた」

抜け出すところを、見られていた？

瞬間青くなったスノーリアだったが、もうひとつの引掛かかる発言に、パチリと瞬きする。

きつと、ここへ？

それでは、まるで予めスノーリアが城を抜け出し、どこへ行くか知っていたようではないか。

「……そういえば陛下、何故この森に入りましたの？」

城のすぐそばにあるこの森は、緑の魔女と呼ばれた人物が治める土地で、限られたものしか内へは入ってこられないよう術が掛かっているはずなのだ。

いつの間にかスノーリアの手を引いて歩き出していた彼が、顎をしゃくる。その先には、森に溶け込むような自然さで佇む赤毛の文官がいた。彼もまた、儀礼服ではなく旅人風の出で立ちをしている。スノーリアの視線に気付き、人懐こい笑みを浮かべて一礼する。剣を履いていることからすると、護衛を兼ねているのか。文官なのに。

「アレは変わった特技を持っていてな。大概の結界の類いは効かぬ質らしい」

「はぁ……、では、お婆さまの術が消えたわけではないのですね……」

呆然とした思考のまま、ポソリと呟いたスノーリアに彼は眉を上げた。

「雪白姫　ではそなたが緑の魔女の後継というのは誠なのだな」
今度こそ、スノーリアの息が止まった。

(3)

スノーリアはその人のことを、“おばあさま”と呼んでいた。

血の繋がりがああるわけではなかったが、本当の祖母のように、その人の側では自分自身でいられ、安らぐことが出来た。

両親や、兄妹といるときよりも、一緒にいて安心できる人だった。彼女は王女じゃなくてもスノーリアを慈しんでくれたから。そして、自分のおかしなところも、おばあさまがいてくれたからこそ、受け入れることが出来たのだ。

おばあさまは緑の魔女。

大地と植物に祝福された魂を持つ人だった。

自分の漏らした一言に柔らかな頬を強張らせ、警戒したようにこちらを見上げる少女に、失敗したか、と彼は苦笑する。

しかし、今までのどこか隔たりのあつた眼差しより、こうして向けられる強い視線の方が、彼の目にはよほど好ましく映った。型にはまった姫君ではなく、スノーリアという少女の意思を感じられて

唇が無意識に笑みをかたどる。

「姫？ 水を汲みに行くのではなかったのかな」

その瞳を覗き込むように屈むと、近づいた距離と同じだけあとずさったスノーリアは、ムツと唇を引き結び、国王の手から桶を奪い返した。その勝ち気な態度に、ますます彼の笑みは深くなる。

「国王陛下が何の気まぐれか存じませんけどつ。手伝いは不要ですわっ」

怒りにか戸惑いにか頬を紅潮させて発言する少女から、またも彼は桶を取り返す。軽く肩に担ぎ上げて、手の届かない高さまで持ち上げると、にやりと意地悪く唇を曲げた。

からかわれていると察したスノーリアは、啞然として自分の倍ある男を見上げる。

「……っ陛下！」

「エドヴァルトと呼んで下さらないと」

国王陛下じゃ貴女の母君と同じだからね、と言いつい訳になるようなならないようなことを言い、彼女に無茶を要求した。

「こちらですわ」

淑女らしくはない、この態度は淑女らしくはないと理解しつつもスノーリアは腹立たしい気分のまま、プイと顎を背け、“名を呼べ”という彼の求めに応じることなく、泉に向かって歩き出したのだった。

『白雪姫』。

『緑の魔女の後継』。

久しく投げ掛けられていなかった言葉に、スノーリアは身体の色が凍えるような心持ちがした。

雪白、というのはランシア王家で彼女だけが譲り受けた母の銀髪を揶揄する呼び名。今はない極北の王国からこの地に嫁いだ祖母から継いだもの。

古く永き血を持つことを、示すもの。

三十年前はさほど特別ではなかったそれが、意味を持つものになったのはあの国が滅ぼされたとき。

そして、“緑の魔女の後継”に至っては誇大評価もいいところだった。

自分には劣ったチカラがあるだけで、おばあさまのようなチカラはないというのに

昏い気持ちになりかけたスノーリアは、柔らかな緑の匂いのする

風が頬を撫でてゆく気配に、ハッと俯いた頭を上げる。

わたくしの可愛いスノウ。

お前が自分を蔑むのは間違っていますよ。

何故そう思い込んでしまったのかは知りませぬが、お前を厭うことなど何もないの。

顔をお上げ。

そう、お笑いなさい。

生命を謳うのが我らが緑の役目

森に満ちた彼の女の声かのひとが、スノーリアに届く。

王族のオマケで居なくてもよいものでも。

おばあさまにとっては、オマケでも、いらぬものでもなかったのだから。

俯いていては叱られる。

きゅっと顔を上げると、こちらに囁きかけてくる緑が目に見る。

大丈夫、大丈夫よ

愉しげに後をついてくるブランシェリウム国王が何を考えてスノーリアを構うのか、誰もが避けている諱を口にしたかは知らないが、オマケでも、ランシアの国名を戴く者として。そしておばあさまの“可愛いスノウ”として。

彼が自分の周りに害を為すならば、容赦はしないと小さな胸に誓いを立てた。

スノーリアが見せる警戒と困惑の眼差しに、まだ彼女はこちらの申し出を知らないとエドヴァルトは悟る。

幼いながらも王族としての矜持は確としている彼女は、姉姫への求婚相手が自分自身の相手になったとわかれば、どういう態度になるものか。今までのように姫らしく礼儀を弁えた距離を保ったまま、内では拒否するか、少なくともあの様に素直な感情を見せてく

れることはなくなるだろう。

それは、面白くない。

城内でのスノーリアは、幼いながらも姫君として立派な態度なのだが、画一的でつまらないといえばつまらない。

エドヴァルトが興味を覚えたのは、森で自由に振る舞う妖精だったからだ。

あの先進的な女王の下で、個性を抑える必要はないと思うのに、『スノーリア姫』はよもすれば居ることを忘れるくらい控えめに、その存在を沈ませている。

彼の接待役として公に姿を現したとき、思い出したように姫に向けられた視線に、彼は気づいていた。

女剣士として名高い一の姫フレリア、世に名だたる美姫として各国から求婚が絶えなかった二の姫シルビアの噂話は良く耳にしていたが、末姫の話だけなかったことも。

ランシアには三人の姫がいると一般には知られている。だが、三の姫がどんな姫なのか、改めて調べてみると、逆に疑問を覚えるほどその情報は少なかった。

彼自身、ランシアの末姫が雪白と呼ばれていること、緑の魔女の後継という話は、ザアットとの戦で知ったのだ。銀の髪を持つ一族を滅ぼした、あの国との戦の中で。

姫が持つ価値を考えると、保護され隠されるのは当然。しかし、姫自身はどういったわけか、自分に重きを置いていない素振りを見せる。

それが何故なのか、気になるところだが。

とりあえず、誰の邪魔もない、スノーリアが自然体を見せる森にいる今のうちに、彼女との距離を近づけてしまおうと、彼は決意した。

一回り下の少女を本気で籠絡しようと思策する自分を見る、臣下の呆れた視線が邪魔だと思いつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7685r/>

銀の歌姫 花冠

2011年10月5日16時01分発行